僕と君

紀メイサ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕と君

【Ｎコード】
Ｎ６１５３Ｏ

【作者名】
紀メイサ

【あらすじ】
海の向こうからやって来た、『彼女』。
けれど、『彼女』は何も聞かず・何も見ず・何も言わない、心を閉ざした少女だった。

『僕と君』

海の向こうから彼女はやって来た。どうやら、『トカイ』という所から来たらしい。

僕は彼女を知っている。けど、知らない。

『彼女』という存在は知っているけれど、『彼女』という人は知らないんだ。いつも遠くから『彼女』の存在を僕は見つめている。

彼女はいつも一人でいる。晴れの日も、雨の日も、曇りの日も、そして雪の日も。

彼女はいつも耳を塞いでいる。何を聴いているのか分からないけど、いつも繋がれていないヘッドホンを付けている。

彼女の瞳はいつも真っ暗だ。光を浴びてもそれは黒く、輝くこともない。暗くて深い瞳。それはまるで、太陽の光が届かなく、特定の生き物しか生きられない深海のような深い瞳。

彼女はいつも口をきかない。喋れないわけじゃないけど、彼女はいつも口を閉ざしてる。

僕は君が誰かも、どういう所から来たかも、声さえも知らない。だけどそんな君のことが、僕は気になる。

だから、僕は君に話しかけてみることにしたんだ。

「やあ、初めまして。何してるの？」

「……」

彼女は何も答えてはくれなかった。

「君はどこから来たの？　なんでいつも一人なの？　誰かを待ってるの？」

「……」

彼女は僕のことを見てくれなかった。

ヘッドホンで僕の声が聞こえていないのかもしれない。何かに夢中になっていて視界に僕が入っていないのかもしれない。もしかしたら彼女は、口がきけないのかもしれない。

それでも僕は彼女に話しかけ続けた。

＊　＊

私は海の向こうからやって来た。汚れに汚れた『トカイ』という所から。

私はいつも一人でいて他者との関係を絶っている。ヘッドホンを付けて外の音を遮断する。光を入れずに暗闇の中を歩いている。災いを起こさないように言葉を忘れている。

そんな私に彼は声をかけてきた。

彼が誰かも、どんな人かも分からない。そもそも話したこともない。なのに、彼は私に声をかけてきた。

『君はどこから来たの？　なんでいつも一人なの？　誰かを待ってるの？』

彼は何の迷いも疑いもなさそうな、無邪気な顔で私に質問を繰り返す。

お前は一体何なんだ？　そんなことを聞いてどうする。お前には関係ないことだ。

……。

……だけど、私に話しかけてきたのは、お前が初めてだ。

＊　＊

僕はまた彼女の許に行った。

相変わらず彼女は、何も答えてはくれない。僕を見てはくれない。

でも、その日の彼女はこれまでと違ったんだ。
いつも付けているはずのヘッドホンが首にかかっていて、その下に隠されていた両耳が露出していた。
僕は嬉しくなって、また声をかけてみたんだ。
「やあ、こんにちは。今日はヘッドホンを外してるんだね」
「……」
彼女は何も答えてはくれなかった。だけど、僕は話しかけるのを止めなかった。
「ねえ、君はどうしていつもヘッドホンを付けているの？　何か聴こえるの？」
「……」
僕は首にかかったそれを見ながら、聞いてみた。
すると、彼女は初めて僕の方を向いた。目は合わせてくれなかったけど、首にかかったヘッドホンを外して、それを僕の耳に付けてくれた。
僕は前よりも僕の問いかけに応えてくれるのが嬉しくて、耳に付けられたヘッドホンに耳を澄ましたんだ。
そこからは何も聴こえなかった。誰かの声も、足音も、自分の声さえも、何も聴こえなかった。ただ、目の前にある風景が無音で動

いていくだけ。

――ここは、一体……。

そう思った瞬間、隣にいた彼女が僕からヘッドホンを外した。

途端、一気に耳が賑やかになった。聴こえなかった誰かの声が聞こえ、足音が聞こえ、普段気にしない自分の呼吸音もやけに大きく耳元で響いて耳が少し痛くなる。

今まで無音で動いていた風景も今は音を取り戻して、キャンバスに彩られた絵のように鮮明で、生き生きしていた。

何となく、さっきまでの静寂が愛おしくなるような気がした。

「……」

彼女は何も言わず、僕から外したヘッドホンを自分の耳に戻す。

「そうか、君はこれを聴いていたんだね」

僕は少しだけ、彼女に近付けた気がして、にっこり笑った。

＊　＊

私は外の音が嫌いだ。人の話し声、足音と車の音、そして自分の

声、全てが雑音に聞こえて仕方がない。

音は人を不快にさせ、人の言葉は、他者を半強制的に動かし、傷付ける。そんな汚れた音を、私は聴きたくない。

だから私は自ら耳を塞ぎ、外部の音を遮断する。

……。

……だけど、彼の声だけは、ヘッドホンをしていても耳に入ってくる。彼の声は、私の耳に心地よさを運んで来てくれる。

彼なら、私のいるこの世界が分かるかもしれない。もしかしたら、この闇が見えるかもしれない……。

＊　＊

暫くして僕はまた彼女の許を訪れた。

彼女は、この間のようにヘッドホンを外していて外の音を取り入れている。

僕は嬉しくなって、彼女の隣に座っていつものように質問の会話を始めた。

「やあ、おはよう。今日もいい天気だね」

「……」

彼女はやっぱり返事を返してはくれなかった。

だけど、僕の言葉が聞こえていることを教えてくれるかのように、いつも一点を見つめて動かなかった瞳を、晴れ渡った空に向けて小さく頷いてみせてくれた。

たったそれだけのことが、僕にとっては凄く嬉しくて、彼女がいつも何を見ているのかを聞いてみた。

「ねえ、君はいつも何を見ているの？　何が見えるの？」

僕は彼女の瞳を覗き見るように、体を前に乗りだした。

すると、彼女は前と同じように首にかけていたヘッドホンを僕に付けて、更に手を伸ばした。

瞼の上から感じる彼女の手の温もり。彼女の手が僕の目を塞いだのが分かった。

それと同時に以前のように、僕の耳から音が無くなり、今回は無音で動く風景も見えなくなった。

音のない世界に、何も映らない真っ暗な視界。右を向いても左を向いても、それが本当に右を向いているのか、左を向いているのか分からないくらい真っ暗な世界が広がっている。

まるでそれは、いつも彼女の瞳に浮かぶ、あの深海のような暗さだった。

音もなく、光のない世界を僕は一人さ迷っている。温かいはずの身体も、どんどん冷たくなっていくような気がしてならない。

――ああ、なんて寂しい世界なのだろう……。

そう思った瞬間、僕の視界は一気に明るくなった。

「うわっ」

突然の光に僕の目は驚いて、思わず目を細める。真っ白な世界が広がっていた。

外の光とはこんなにも明るかったのか。僕はふと、そう思った。

目が慣れてくると、始めに映ったのは正面から見た彼女の顔だった。

彼女の黒い瞳は、じっと僕を捉えて離さない。僕も彼女を捉えて離さない。初めて僕らが視線を合わせた瞬間だった。

彼女は僕を見つめたまま、語りかけてきた。と、言っても口を開いてくれたわけじゃない。目で訴えかけてきているんだ。

――私は、どこにいる？

僕は彼女を見据えたまま、その瞳に答えた。

「君はいつも、あんな寂しい所にいるんだね」

僕の答えに彼女は一瞬、頬を緩ませたような気がした。

＊　＊

私は外の世界が嫌いだ。この世界は汚れ過ぎてしまった。言葉で人を傷付け、頂点に立つ者だけが笑っている、そんな汚れきってしまった世界を見るのが嫌だ。

だから、私は自らの視界を閉ざし、目を開いていても何も映さないことにした。真っ暗なこの世界だけが私の拠り所……のはずだった。

汚れきってしまった外の世界など、もう見たくないと思っていたはずなのに、そんな世界から彼はいつも、暗闇にいる私に声をかけてくれていた。

返事をしない私に飽きもせず、心地よい声で私に語りかけてくれた。

――嬉しかった。

今までそうしてくれる人が私には居なかったから。

次第に私の中で『彼』という存在は大きなものになっていった。

しかし、彼の存在が大きくなるにつれて、私の中にある真っ暗な世界がどんどん冷たくなっていく。

音もなく、光もないこの世界が怖くなっていく。私は独りなのだと、

教え込むように……。

……。

……だけど、そんな私の世界を彼は分かってくれた。寂しい世界だと言ってくれた。

ああ。彼なら、私をここから救い出してくれるかもしれない……。

＊　＊

僕はいつものように彼女の許に遊びに行った。

彼女は僕が来たことに気が付くと、耳に付けていたヘッドホンを外して僕の方に振り返った。

「やあ、元気かい？　今日は何を話そうか」

彼女は相変わらず口を閉ざしたままだけど、その瞳は以前ほどには黒くはなかった。

少しずつ距離が近付く彼女と僕。どこの誰かも、どんな人かもお互いに分からない。

それでも近付く互いの距離が嬉しくて、この日は彼女への質問じゃなくて、僕の話を聞いてもらうことにした。

「僕ね、一人ぼっちだったんだ。と言っても、最初から一人ぼっち

ってわけじゃないんだけど。――僕は……」

「……」

「僕は、家族に捨てられたんだ」

＊　＊

『家族に捨てられたんだ』

それは、突然の告白だった。

彼はいつも明るかった。返事をしない私にいつも微笑みを向けてくれた。

悩みなんかなさそうな無邪気な顔をいつも私に見せて、声をかけてくれていた。

そんな彼から突然聞かされる、彼の過去。私は彼の言葉にただ耳を傾けることしか出来なかった。

『僕ね、小さい頃から鈍くさくて、いつもみんなから馬鹿にされて笑われてきたんだ。
そんな僕を母さんたちは、みっともない、どうしようもない子。何の役にも立たない子って、いつも言ってた』

へへへ、と彼は、はにかむように笑って話す。

『けどね、僕にとっては、みんなが笑ってくれるのが嬉しかったんだ。
僕がドジをすれば、それを面白がってみんなが笑ってくれる。
僕がヘマをすれば、楽しそうにみんなが笑ってくれたんだ。
僕は、みんなが笑ってる顔が好きだった。
鈍くさくて、役立たずの僕だけど、そんな僕でも唯一出来ることは、みんなを笑わせることだけだったから』

当時のことを思い出すように彼は、嬉しそうにその話を私に聞かせた。

『だけど、母さんたちを笑わせることは、一度も出来なかった……』

彼は一瞬、表情に陰りを見せた。

『母さんたちは、みんなに笑われてばかりの僕に呆れて、僕を一人置いて、どこかへ行っちゃった』

言葉とは裏腹に、彼の顔にはいつものような笑い顔が浮かんでいた。

私にはどうしても分からなかった。

彼にとってとても辛い出来事のはずなのに、なぜ、彼はそんな風に笑っていられるのだろうか。

そんなことがあったにも関わらず、それをどうして受け入れることが出来ているのかが、私には分からなかった。

言葉にするまでもなく、彼はその問いに微笑みながら答えてくれ

た。

『僕も最初は君みたいに、何も聞かず、何も見ず、何も言わない生活を送っていたんだ。
けど、そうしている時間が増えるたびに僕が僕でなくなっていくような気がして。
そう思えば思うほど、暗闇の世界に居る自分が気持ち悪くて仕方なかった』

彼は闇の中にいた時の苦しみを思い出したかのように、胸元でぎゅっと手を握った。

『でも、それに気が付いた時、自然と気持ちが楽になったんだ。
僕は昔の自分が好きだったんだ。
馬鹿にされてもみんなを笑わすことが出来る自分が大好きだったんだ。
例え、周りがどんなに鈍くさい自分を嫌がっても、それが自分なら、貫き通せばいいんだって分かったんだ』

彼は私に無邪気な笑顔を見せた。純粋で真っ直ぐで綺麗な笑顔。
彼の瞳は輝いていた。何がこんなにも彼に力を与えているのか不思議だった。

『闇にいたから、小さな一筋の光でも見落とさずに気付くことが出来る。
だから君を見かけた時――あっ、僕と同じ子がいる、って思ったんだ』

――闇にいたから、小さな一筋の光でも見落とさずに気付くことが出来る。
闇にいた者にしか気付けない一筋の光。

彼の言葉が耳に残り、体全身に響き渡る。

そして、私がどうして、彼の言葉だけが聞き入れることが出来るのかが、やっと分かった気がした。

同じ境遇を体験した者同士が感じ合える感覚。

言葉にしなくても、それらは無意識のうちに肌で感じ取れてしまう。

けれど、私と彼との、この違いは一体何なのだ……。

『君と僕は良く似ている。名前も知らない同士だけど、僕は君が気になって仕方がないんだ。
君が僕の声を聞いてくれたり、僕を見てくれると凄く嬉しくてたまらないんだ。だから――』

彼は、はにかみながら頬を赤らめ、上目遣いで私を見た。

『僕と、友だちになってくれないかな?』

――ああ、これが私と彼の違いか。

私と彼は似た者同士。世界の醜さと身勝手さを知った仲間だ。

私達の違いは、彼はそれを知った上で前に進んだ。私は心を閉ざした。

彼は世界の良いところを見つめ続け、私は悪いところを見つめ続けていた。

彼は今でも前に進み続けている。だけど、私は……。

――僕らは一緒だよ。

「ッ！」

ふと、声が聞こえた気がした。

顔を上げると、いつもの無邪気で優しい彼の笑顔があった。

「さあ、行こう」

彼はそう言うと私の手を取り、外の世界へと連れ出した。

彼の手に引かれ、動き出す私。

後ろを振り返ると、そこにはもう、悪い所を見過ぎて、汚れてしまった世界に入り込むのを恐れていた私は居なかった。

手を握り返すと、彼はにっこり微笑み返してくれる。

「僕の名前は永遠（とわ）。君の名前は？」

「……」

――名前。

私にも昔、呼び名があった気がする。

いつも誰かが私のことを呼んでいた気がする。

そう、彼のような心地いい声で。それは……。

「……怜（れあ）、杏」

（後書き）

最後まで読んで頂き、、ありがとうございます。

人は様々な辛い過去を背負って今を生きています。

その過去をどう受け取っていくかによって、その人の人生も大きく変わっていきます。

それを表したくて、悪いところしか見てこなかった、心を閉ざした怜杏≪れあ≫。

辛い過去を経験しながらも、それを受け止め、良いところをみようとしてきた永遠≪とわ≫、の対照的な二人を絡ませてみました。

まだまだ未熟者のため、文脈も伝えたいことも、しっかりしていない作品だと思いますが、これから徐々に私自身、成長していきたいと思いますので、また機会があった時に、読んで頂けると、光栄です。

最後になりますが、『僕と君』を読んで頂き、本当にありがとうございました！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6153o/

僕と君

2010年10月31日15時13分発行